

[課題演習概要]

傍観者を減らすいじめ防止を目指した道徳科の授業の在り方 —自分事として捉えることに着目して—

岡 幸 生

Yukio OKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：いじめ防止，傍観者，「考え，議論する」道徳

1 研究の目的

文部科学省(2017)は、「いじめの問題への対応は学校における最重要課題の一つ」と述べ、文部科学大臣メッセージによると、『『特別の教科 道徳』の充実が、いじめの防止に向けて大変重要である」と述べられている。

さらに、生徒指導提要(2010)において、「傍観者のなかからいじめを抑止する『仲裁者』が現れるような学級経営を行うこと」と示されている。傍観者について、藤村(2018)は「いじめは自分とは無関係な人たちの問題であると捉えている」あるいは「いじめの標的にされるかもしれないという不安などを感じている」と述べている。

そこで、本研究は道徳的な課題を自分事として捉えることで傍観者を減らす道徳科の授業の在り方を明らかにし、いじめの防止につなげることを目的とする。

2 研究の計画

生徒の傍観者としての実態を把握し、その上で効果的な道徳の授業の在り方を研究していく。

まず、生徒自身が傍観者になり得る存在であるという自己認知を促すため「いじめ」を題材とした授業を実施し、生徒の実態を分析する。

次に、「いじめ」を未然に防ぐ観点から題材を選択し、「自分自身に関すること」から「人との関わりに関すること」へ段階的に授業を実施する。

3 研究の内容

(1)「特別の教科 道徳」における指導方法

文部科学省(2016)によると、道徳科の質の高い

指導方法について3つ挙げている。

読み物教材への自我関与が中心の学習について、伊崎(2020)は、学習者によって多岐にわたる印象や解釈を抱くため、道徳的価値の焦点化・単純化・明示化が求められると述べている。

問題解決的な学習について、田中歓(2018)は、問題意識の焦点は一人ひとり異なるため、立場の違いを共有したり、違いが生きるような話し合い活動を開発したりする必要があると述べている。

道徳的な行為に関する体験的な学習について、田中千映(2020)は、子ども自身が道徳的価値を実感することができ、ねらいに応じて取り入れることで自己の生き方についても考えを深めやすいと述べている。

(2) 自分事として捉えることに着目した実践

小澤(2017)によると、モラルジレンマ課題は、道徳的な価値の対立・葛藤状況が物語の中に埋め込まれているため、課題を自分事として受けとめ、「考える」道徳の指導方法として取り上げる価値があると述べている。

(3) 授業の概要

前年度は、いじめに関する事前アンケートを実施し、傍観者の視点を明らかにしたいじめを題材とした授業(表1)を行った。

表1 授業の概要 I

日時	令和3年1月13日(水)
対象	福岡市立T中学校第2学年4組(32名)
内容項目	C-11 公正, 公平, 社会正義
教材	あすを生きる「ヨシト」

本授業では、展開段階において傍観者として主人公が葛藤している様子を捉えさせ、本問題を解決させる活動を取り入れた。

授業前アンケートで「仲の良い友達に注意ができる」と回答していた生徒のうち、授業後の記述で「注意できない」と考えが変容している生徒は

24%であった。そのことから、自分自身が傍観者になり得る存在であることに気づけている生徒が少ないことが分かる。その理由として学習プリントからいじめを身近に感じていないことが挙げられる。

このことを踏まえ、今年度はいじめを未然に防ぐ観点で自分自身の身の回りの小さな問題を場面とした題材を選択した。そこで、初めに傍観者になり得ることを認識させ、自分自身の葛藤に向き合う授業(表2)を実施した。

表2 授業の概要Ⅱ

日 時	令和3年7月7日(水)
対 象	福岡市立H中学校第2学年1組(32名)
内容項目	A-1 自主, 自立, 自由と責任
教 材	きみがいちばんひかるとき 「許せないよね」

本授業では、展開前半においては「私」が葛藤している様子について捉えるために、そのときの言動や心情に着目させた。後半では、自分自身の中にある葛藤に気づきそれに向き合うために、揺さぶりの発問を行った。さらに、主発問において多面的な思考を促すために、グループ活動で様々な状況を想定させた。そこではグループ内で揺さぶりの質問や問い返しをさせた。これにより、自身の理想と現実気付く深い学びになったと考えられる。

授業前アンケートで「周り意見が異なるときでも友達に対して自分の意見を発言できる」と回答した生徒は全体の75%であった。授業後それらの生徒のうち50%は「周りに流されるかもしれない」という意見に変容していた。このことから、「発言できる」と回答していた生徒の半分は自分の現状を把握することができ、授業を通して、「自分との関わり」で考えることができていた。一方で、傍観者にならないようどのように乗り越えるべきか考えることにはつながっていない。

そこで、次に傍観者となった「僕」の原因を追及し、自分事として捉えた上で問題を解決する授業(表3)を実施した。

表3 授業の概要Ⅲ

日時	令和3年11月30日(火)
対象	福岡市立H中学校第2学年1組(29名)
内容項目	B-8 友情, 信頼
教材	きみがいちばんひかるとき 「松葉づえ」

本授業では、展開前半においては「僕」の心情面に着目した。そこで、「僕」の「大野君」への友達としての心情の変化を把握するために、ハートメーターを用いて心情の変化を対比させた。後半

では、見ているだけになってしまった「僕」に対して、自己の視点で解決策を考える活動を行った。そこで、多面的な思考を促すために、班活動では新たな気づきや違った意見等に着目し交流するよう指示した。

授業分析によると、問題解決の場面で、「助ける」や「勇気を持って行動する」等の行動面に着目した回答が全体の75%であった。一方、行動面等の表面的なものだけでなく、心情面にも着目している生徒は17%であった。しかし、班活動後の記述では「対等な関係」等心情面についても考えられている生徒が全体の79%にのぼった。これにより、班活動を通して多面的・多角的な思考が行われ問題解決を行なうことができていたと考えられる。

4 成果と課題

本研究の成果として、生徒自身が傍観者になり得る存在であることに気付いている生徒が少ない実態がある場合は、いじめを未然に防ぐ観点から自分自身の身の回りの小さな問題を場面とした教材を選択することで生徒がより自分事として考えることができると明らかにできた。

また、自分事として考える上で多面的・多角的な思考を促すために、班活動において生徒間で揺さぶりの質問等を行わせることや考えの共有の際視点を設けることは有効である。特に、問題解決的な学習においては新たな視点に気づき、問題を多面的に捉え直す点においても有効であった。

一方で、研究に関わる班活動等における多面的・多角的思考を促す手立てが授業後学校生活でどのように作用しているのかについては見取ることができていない。そのため、「傍観者」の減少に関する分析が不十分であった。

さらに、本研究では授業の在り方を中心に進めてきたが、「いじめ」防止においては道徳を要として他の教育活動とも連携をとることが求められる。今後は教育活動全体として、仲裁者となる生徒の育成を目指していく。

主な引用・参考文献

- 伊崎一夫 2020 「考え、議論する道徳」への質的転換に関する研究(2)
 田中欽 2018 道徳授業における問題解決的な学習の探究
 小澤理恵子 2017 自分事として課題を捉え、考えを深める青年期の道徳教育ーモラルジレンマ物語課題に読み物資料を導入した場合の検討ー